Kyushu University
Faculty of Design

Associate Professor
HARUKA SOGABE

河川標識のデザイン

背景

河川は、散策やスポーツ、水遊び、イベント等が行える場所として我々の日常生活の一部として、安らぎや潤いを与えてくれる存在である。一方で利用方法を誤ることで重大な事故が発生したり、大雨等による増水により我々の生活を脅かす存在になることも忘れてはいけない。河川は多くの人々が利用するため、安全にみんなが気持ちよく利用できるよう多くのルールが定められている。それらのルールは、河川標識として河川のあちこちに設置され、利用者への適正な利用を呼び掛けている。しかしながら、標識には内容がわかりにくかったり、明確なメッセージ性がなかったりするものが少なくない。また、たくさんの情報を提供しようとするあまりに複数の標識が設置され河川景観を乱していたり設置量の多さから管理がきちんと行われていなかったりするものもあり、河川標識の設置意図に対し、十分な効果が得られていない状況がある。そこで、国土交通省九州地方整備局河川部のみなさんと河川標識が河川における情報提供ツールとしてしっかり役割を担うよう河川標識改善のプロジェクトを実施することにした。

調査

分類	種別	細目	目的
規制	禁止措置	立入禁止	河川敷や河川施設等への立入禁止を周知するもの
		利用制限	利用行為の制限、河川敷への車の乗り入れ、および駐車禁止などを周知するもの
		予防措置	廃棄物等の不法投棄の禁止を周知するもの
	注意喚起		増水や転落などによる事故の発生を防ぐために注意喚起を周知するもの
啓発	マナーアップ		ポイ捨て抑止やペットの糞の後始末の呼びかけなど利用マナーを周知するもの
記名	施設名称		河川の情報館やポンプ場、水門等の河川施設の名称を周知するもの
	河川名称		河川名称を周知するもの
案内・解説	施設案内		河川の情報館やポンプ場、水門等の河川施設の役割や機能を案内・解説するもの
	歴史・自然		過去の水害等の概要や周辺の歴史、自然や生物等について案内・解説するもの

フィールド調査を行い、河川に設置されている標識の整理を行った（表）。河川には、規制・啓発に分類される河川利用時のルールを示す標識が非常に多く設置されており、調査エリアの約 8 割が規制・啓発標識といえた。規制・啓発標識のほかには河川名称等を示す記名標識と、地域の自然や歴史、河川施設等を説明する案内・解説標識があった。規制・啓発標識は、さらに禁止・注意喚起・マナーアップに分類することができた。標識の設置に際してのルールがないために、近距離の間に同じ内容の標識が複数設置されていたり、場当たり的に設置され、そのまま管理がしっかり行われていないと言える状態のものがあった。

方針

調査の結果をふまえ、以下のデザイン方針を設定した。

【規制・啓発標識／統一化の方針】

規制啓発標識に示される内容は、河川利用におけるルールであるため、いずれの河川にも共通して言えることである。したがって、標識デザインのルールを定め、そのルールに則った標識づくりを行っていくことにより、利用者はあちこちの河川で同様の標識を確認する機会が増えるため、利用者の学習効果を促進できると考えた。

【記名・案内・解説標識／個性化の方針】

記名や案内・解説標識は個々の河川の特徴を伝える役割を担っている。したがって、その個性を標識自体にも表現することで標識に景観財としての役割を持たせ、各地域独自の河川景観の形成を目指すこととした。標識をきっかけに地域の人々にとって自慢といえる河川景観を創出することで地域と河川を近づけ河川管理における地域の協力を引き出しやすくすることを意図した。

規制・啓発の統一化の方針を具現化するために調査で得られた規制・啓発標識の抱える課題を整理した。一つ目の課題は、重要度の異なる複数の標識がその違いを明確にせず設置されていることである。禁止事項に分類される標識の内容を確認すると、これらのルールを守らない場合、重大事故につながる可能性があると言えた。一方でマナーアップに分類される標識は、他の利用者へ不快感を与えることはあるが、重大事故につながる可能性は極めて低いと言えた。しかしながら、現状ではこれらの標識が区別されることなく、いずれもイラストや文字情報を用いて表現されており、利用者にとっては直感的にその標識が示す内容の違いを理解しにくい状況だと言えた (①)。

①重要度の違いが視覚的に示されない事例

二つ目の課題は、伝えたいメッセージは同じであるにも関わらず異なるテイストのイラスト表現を行っているため、まるで異なるメッセージかのように受け取れることである。フィールドを行った 2ｋｍ程度の区間に犬の糞の後始末に関するメッセージ標識が 3 種類ほど存在した（②）。いずれの標識にも犬のイラストが用いられているが、そのイラストのテイストが異なっていたり、文字情報とイラストのレイアウトが統一されていないため、利用者にとっては内容は同じメッセージであることを理解しにくい状態だと言えた。以上の課題をふまえ規制・啓発標識の重要度の違いは、色彩を用いて示すこととし、イラストのテイストや標識レイアウトが異なることによる混乱を防ぐために、ピクトグラムを用いた表現を行い、標識のレイアウトルールを作成することとした。

②内容の同じメッセージが異なるテイストのイラストやレイアウトで表現されている事例

Kyushu University
Faculty of Design

Associate Professor
HARUKA SOGABE

情報の重要度	高／禁止事項	中／注意喚起事項	低／マナー啓発事項
標識の使用色	赤	黄	緑

ここには、入ってはいけません

高いところから落下する恐れがあります

国土交通省
九州地方整備局

サイレンが鳴ったら川からあがろう

サイレンはダムから水を流す合図です
川の水が増えます

国土交通省
九州地方整備局

KEEP CLEAN 川をきれいに

ペットのフンの処理は、飼い主の責任です

国土交通省
九州地方整備局

デザイン

情報の重要度の違いは、赤・黄・緑の色彩を使い分けることにより示すことにした。この3色は信号にも用いられており、日常的にその色彩の違いにより異なる情報が発せられていることを人々は認識している。したがって、重大事故につながる可能性があることを知らせる禁止事項には赤、有事の際等には注意すべき事項があることを知らせる注意喚起には黄、みんなが気持ちよく利用するためのルールを知らせるマナー啓発には緑を用いることを色彩のルールとした。

標識は 2 つの正方形を組み合わせた形状により構成することとし、上段の正方形には対象となる行為を示すピクトグラムを、下段の正方形には周知事項を文字情報で提示することにした。フィールド調査から河川標識は、複数個が同じ箇所に設置される傾向があることがわかっており、バラバラの形状をした複数の標識が近い距離に設置されることにより、標識が乱立しているようなイメージを創出していると考えられた。したがって標識形状にもルールを定めることで、複数個設置された場合にも統一感のある印象を与えることができると考えた。周知事項は、見出しとなるメッセージとメッセージの理由を解説する文章の構成とし、いずれも簡潔に、専門語は使用せず、わかりやすい言葉で表現することをルールとした。周知事項の最後には、標識の設置者を示し問合せの所在を明確にした。

河川事務所から既存の標識をもとに必要になると考えられる標識内容を募集し、本ルールに則った標識一覧の作成を行い、古くなった標識は適宜本ルールに則った標識に変更していくこととした。

記名や案内・解説の個性化を行うことを基本のデザイン方針とした標識は、標識設置を行う際には地域住民と協議の場を設けデザイン検討を行うことを原則とした。標識デザインの検討過程において、地域の人々の意見を取り入れたり、理解を得ながら標識づくりを行うことで、河川と地域の人々が関わる機会を創出し、河川流域全般のことを協議する機会を増やすことにつなげている。

以上の河川標識に対する考え方やデザインルール、標識一覧、設置方法などはガイドラインとしてまとめ、国土交通省九州地方整備局河川部より発行し、国の管理する九州の各河川事務所へ配布し運用を開始した。運用開始後は、実際に現場で標識管理にあたる人々から運用における課題を抽出したり、ガイドラインに沿って設置された標識がどのように設置されているかなどの調査を行っている。標識の需要変化にともない新たな標識を作成することもあり、現在も継続してガイドラインの改訂版を発行しながら検討を進めている。